

報告

学内サークルにおける自然体験活動の試み

林 韓燮 小野 隆 村田康常
三輪雅美 後藤由美 菊池理恵

1. はじめに

近年、教育現場をめぐる課題として「自然や地域社会と深く関わる機会の減少」、「集団活動の不足」、「物事を探索し、吟味する機会の減少」、「地域や家庭の教育力の低下」などが挙げられている（文部科学省、2008）。また、コロナ禍の中で、学校行事およびサークル活動が縮小または制限され、大学生活で行事やサークル活動の実施が難しい状況が続いている。なお、文部科学省（2016）は、学校の中での学びだけではなく、NPO 法人や企業等をはじめとした地域の人々や団体の参画を得て、多様な学習・体験・まちづくり等の活動を促進することとしている。

このような最近の教育現場をめぐる課題に対応するためには、様々な観点から対策を講じる必要があるが、なかでも体験活動が課題解決に果たす役割は大きいと考えられる。

そこで本研究では、SDGs の目標達成に焦点を当てた自然体験活動に着目し、学生主体の課外活動を支援するプロジェクトを企画した。自然体験活動は、「集団生活の中で協調性・自律性を育む」、「『知』を総合化し、課題発見能力や問題解決能力を高める」、「学びの意欲を促進する」、「幅広い年齢層との多様な交流の機会を得る」ことが期待されている（文部科学省、2008）。本学の学生が自然とつながり、地域と連携して自然体験活動に取り組むことで、SDGs の目標達成に貢献することができると考えられる。

自然体験活動は、人材を育成するための原点といわれている。本研究は、SDGs の目標達成のための自然体験活動を中心に、キャンプ、ハイキング、農園体験、クリーン活動など、自然・環境に関わる課外学習の支援プロジェクトである。これらの自然体験活動は、学生主体の活動であり、学生が地域の子どもたちや住民と関わり、支援活動を重ねることによって、「社会を生き抜く力」と「自然を思いやる心」を養う効果が期待できる。大学から離れた自然の中で人と自然とつながる経験を通して人とのコミュニケーション能力の向上や生活習慣の見直し、人間関係の形成力を高め、将来の子どものための教育を担うための人材を育成することが目的である。

2. 学内サークルについて

本研究は、保育・幼児教育の中で SDGs の目標達成のために、取り組まれた自然体験教育の実践活動である。また、「森のための4つのアクション」を通じて SDGs の目標達成に貢献する学生の自然体験活動を推進・支援する取り組みである。本学は、キャンパスが都心エリアにあり、多くの学生が森とかかわった経験がほとんどない。これらのことから、森を中心にした「森にふれよう」、「木をつかおう」、「森をささえよう」、「森とくらそう」(国土緑化推進機構、2020)の4つのアクションが実現できるよう学生主体の実践活動を支援して、森とつながるような活動内容を企画・検討することにした。この活動は学生生活の中での体験と学びを充実させるだけでなく、10年後を見据

え、主役となる子どもたちの「自然とともに生きる力」を育むための指導者育成にも貢献するという意図ももっている。本研究は、これらのことを実現するために、学内サークルを立ち上げ、課外活動を支援する試みである。

次に、サークル創設の経緯について述べる。

柳城学院は123年の長い歴史をもつ。これまで培ってきた名古屋柳城短期大学の知恵を土台に、新たに設立された名古屋柳城女子大学とも力を合わせて、新しい方法で学生活動を支援することとした。大学生には、充実したキャンパスライフだけではなく、社会人になるための課外活動も重要であると考えている。特に、最近ではコロナ禍の影響で、大学でのサークル活動や学生が集まって行う活動が制限されることが多く、学生が主体的活動を行う機会が極めて少ないのが現状である。

そこで、学生の課外活動への関心度が高いことをヒントに、学内の活動にとどまらず、里山や河川など、自然豊かな環境に出向いて楽しく学べるプロジェクトを計画するに至った。こうした経緯から、本研究はSDGsの目標達成に向けた「木と水と人のつながり」というプロジェクトの下、学内サークルを立ち上げ、学生の課外活動の支援を行うこととした。

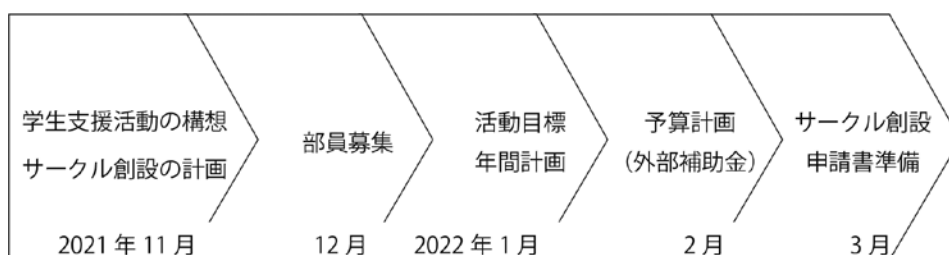


図1 サークル創設の流れ

学内サークル部員は、名古屋柳城女子大学・名古屋柳城短期大学の在籍生で構成された。学生部員が全員保育者養成課程に在籍して保育・幼児教育を専門的に学んでいることも、この活動のねらいの1つである。将来を見据えて子どもたちの「自然とともに生きる力」を育むための指導者を養成するという目標に合致する。学生部員の役割は、自然体験活動内容の提案、活動場所のリサーチ、自然保護活動の計画・実施、子ども参加プログラムの提案・案内資料作成、防災に関する活動の提案であり、提案された活動内容について学生部員とサポート教員が話し合い、実施内容を決める。

なお、学生活動援助金、学生徴収金、クラウドファンディングによりサークル活動費を確保した。クラウドファンディングは、学内教職員を対象に、プロジェクトの概要を説明して理解を求めた。22名の教職員より賛同が得られた。

3. 活動の目標

学内サークルの活動の目標および期待される効果について次のように示す。

保育を学ぶ学生が、子どもたちと自然に親しむ活動を将来の保育・子育て支援活動のなかで展開するための活動体験と知識を蓄積し、子どもと一緒に自然の中で活動して命の大切さや環境保護の

姿勢を共有し、地域や職場に根ざした活動を行っていけるようになることが、総合的な目標である。

まず、野外での自然体験活動・クリーン活動と関連づけながら自然の営みや人間との関わりをテーマにした絵本や児童文学に触れる体験を企画・実施することで、子どもたちと多様なかたちで自然体験をわかち合うことのできる保育者の養成につなげていけると考える。

なお、ネイチャープログラムの体験を通して、自然の中でまずは心も身体も開放することから始め、五感を通して何かを感じ取る体験を積んでいくことができる。学生が自ら体験を通して体得したことをもとに、最終的には保育の中に自然体験活動や木育活動を取り入れる際の立案やそこでの保育者の役割、活動のポイント等を考えることのできる力を育成する。森林環境教育や木育活動の指導ができる保育者を育成することも可能である。

さらに、日本キャンプ協会公認キャンプ指導者資格のキャンプ・インストラクター資格取得を目指す学生が増えることも予測できる。様な取り組みとしては、そのため、愛知県キャンプ協会主催のキャンプ・インストラクター養成研修会を紹介し、取得をサポートすることも可能である。また、キャンプツールを使った野外活動を通して野外レクリエーションの遊び方の開発や遊びの創造性を育むことなどができ、レクリエーション指導者や自然体験活動指導者などの育成にも貢献できる。

これらの成果を得るためには「ESD」、「SDGs」の意義を理解し、気候変動、貧困・格差といった現代社会における課題を複合的に捉え、なぜ今「持続可能な開発のための教育」、「持続可能な開発のための目標」が必要なのかを考える。

また、「自然体験活動」におけるキャンプ、ハイキング、農園体験、クリーン活動など森林の循環を促すための自然・環境に関わる課外学習を「ESD」、「SDGs」の視点で捉え、17の目標のうち「ターゲット4. 質の高い教育をみんなに」、「ターゲット14. 海の豊かさを守ろう」、「ターゲット15. 森の豊かさを守ろう」などを、実践を通して学ぶ。また、自ら体験することで、保育者としての理解及び指導方法を学び、子どもと一緒に取り組む活動を計画・実践できるようになる。

以上の目標を設定し、学生部員の主体的活動こそ、自然と暮らしの関わりを学ぶことができ、2030年のSDGsの目標達成に近づけることができると考えられる。

4. 活動の計画

学内サークルでは、「森のための4つのアクション」の実現に着目し、以下の3つの領域に分けて活動計画（図2）と用品の導入を検討した。

一つ目は、クリーン活動、自然観察、キャンプの領域である。

クリーン活動は、地域を移動しながら、実践することもある。その際、移動可能な個人用のシェルターとして使用できる大型タープシェルターを導入した。必要に応じて宿泊を伴うこともあり、自然界での宿泊にはテントや寝具などの装備は必要不可欠であると判断した。

自然観察もクリーン活動と同様に、宿泊を伴う観察活動の際には、宿泊施設またはテント、寝具などの装備が必要である。また、観察活動やテーブルスタディなどのグループ活動においても大型シェルターとテーブルが必要である。なお、設営と撤収の作業が繰り返されるため、コンパクトかつ軽量用品を選定した。

二つ目は、レクリエーション活動、木育・ネイチャーゲームプログラムの領域である。

「レクリエーション活動」と「木育・ネイチャープログラム」は、午前と午後の部で実践するこ



図2 プロジェクト計画

とができる。これらの活動においても大型シェルターとテーブルが必要である。また、宿泊を伴うことを想定していなくても、学生や木育参加者への手当てが必要な場合などの万一の事態に備え、テントセットをシェルターとして活用することも検討した。

三つ目は、子どもの自然体験活動への支援の領域である。

子どもの自然体験活動は、保護者同伴のデイキャンプ形式で行われるため、自然環境の中で大型シェルターとテーブルを配置して実践することを想定している。テントセットは応急措置のためのシェルターとして活用できるため、今後導入を検討する。

5. 実践活動

5.1. 新歓デイキャンプ（6月12日）

(1) 概要

今回はデイキャンプであり、身近な自然とかわかり、仲間との親睦を深めることを目的に、教員の支援のもとで企画・実践するキャンプ活動である。

(2) 準備及びリスクマネジメントについて

①準備について

デイキャンプの実施に当たり、プロジェクト支援の打ち合わせ会（4月19日実施）にてデイキャンプ実施計画（案）を提案し、実施場所、内容、必要物品の確認および検討した。実施計画を表1に示す。

実施場所は、大学に近く自然が感じられる場所として大高緑地デイキャンプ場を提案し、下見と利用者登録・担当者への確認を得て、プロジェクト教員の打ち合わせ会にて決定した。また、サークル活動を行うために用品の導入を検討し、表2のように購入した。

ランタンについては、宿泊キャンプを実施する際に参加学生がアウトドアショップに訪ねる機会を設けるために、参加学生の購入品として残した。デイキャンプの実施要領について説明をしたうえ、野外炊事の内容と方法は参加部員で検討するよう促した。

参加学生とプロジェクト教員との打ち合わせ会（5月11日実施）では、年間計画や予算内容、クラウドファンディングの実施状況およびデイキャンプの準備について確認が行われた。

②リスクマネジメントについて

幼児は3歳児後半ともなると活動性が上がり、少々危険と思われることも試し探りながら行動するようになる。そのため安全管理の比重を安全教育に移していく必要がある。今回のデイキャンプでは「火をつかうこと」に着目し、炉周りの安全管理や火起こしに際しての安全教育に関する事前

表1 新歓デイキャンプ実施計画

活動名称	新歓デイキャンプ
開催日時	2022年6月12日（日）10時～16時
会場	大高緑地公園デイキャンプ場
経費	A.サークル費:屋外炉1基/520円、保険300円/1人、その他 B.参加者負担:食材1人/約1000円=15000円、交通費など
参加人数	15名（プロジェクト教員:5名、部員:10名）
保険	三井住友海上（レジャー保険）24時間
活動内容	(1) リスクマネジメント (2) タープの設営 (3) 薪割り・火おこし（おおむね10時50～） (4) 野外炊事（おおむね11時30分～14時） (5) 散策などの自由時間（～15時） (6) 撤収（～15時30分） (6) SDGsのクリーン活動

表2 購入物品検討リスト（実施前）

種類	名称（メーカー省略）	数量
ランタン（1/4人）	充電用LEDランタン（部員購入）	5
焚き火台（1/4人）	バーベキューコンロ 焚き火台 1台2役	5
ガスコンロ（ガス）	コンパクトバーナー	5
タープ（1/4人）	正方形タープ ポリコットン	5
ペグハンマー（1/タープ）	ペグハンマー（ペグ6本含む）	5
フォールディング椅子（人数分）	ラウンジチェア	20
フォールディングテーブル（1/4人）	テーブル（高さ調整機構付き）	5
炊事用クッカーセット、ケトル（1/4人）	キャンプクッカーセット（4～5人）	5
ナイフ、鉋、斧など	鉋、のこぎり	5
自在金具、カラビナなど	ライター、着火剤、自在金具、カラビナ、トンク、火ばさみなどなど	1
タープポール	タープポール 250cm アルミ 収納袋 太さ28mm	10
文具類	ファイルなど	1

準備を行った。5月13日の事前打ち合わせでは、当該資料の他、日本キャンプ協会監修の「セーフティアウトドアハンドブック」および「キャンプを企画するため人のためのリスクマネジメントの手引き」をグループLINEに配布し、ミーティングではプロジェクターによりスクリーンに投影しながら、それらの内容の解説を行った。例を挙げると、キャンプ場の色々な場面や様子があちらこちらに描かれた絵図を元に、危険な個所を探したり、間違い探しをしたりする教材となるものを使用した。

（3）フィールドの設営について

今回の活動は、学生が主体的に実践する活動を目的としている。活動は、デイキャンプであったため、宿泊に必要な用具については必要がなかった。しかし、主活動は、火をおこし、燃料は薪をつかったBBQ料理であったため、メンバーは屋外で一箇所にとどまる必要があった。そこで環境整備の一環として日陰を作る必要があった。タープは、六角形ヘキサタープを使用し1枚当たり数名の参加者で設営をした。キャンプ用品の扱いに慣れた教員の指導の下、初心者でも立てやすい形のものを使用した。学生のほとんどが、初めての設営体験だったため、まずシートを固定されるのに必要な、ペグ、ハンマー、ポール、ラインなどの名称を覚えた。そして張り方のコツを体験しながら、設営を終了した。今回の活動場所はもとデイキャンプ場として整備をされていた場所であったため、ペグの打ち込みやタープの向きに配慮しなければならない事柄は少なかった。今後は、タープを含めた自然体験活動に必要な用具の設営練習を実施できれば、学生自身も野外活動に向けた関心が高くなると考えられる。

（4）体験活動①（薪割り、火おこし）

今回のデイキャンプでは「火をつかうこと」に着目し、炉周りの安全管理や火起こしに際しての安全教育に関する事前準備を行った。そして実際に当日の現場において、子どもと一緒に薪割りや火おこしを行うことを想定した活動ができたと考える。具体的には、薪割り時には、鉋や斧は軍手をはめた手で持つと滑って危険なため素手で握るようにすることが分かった。また火おこし時には、

空気が入るように薪を揃えてお互いにもたれ掛かる様に組んだり井桁の様に組んだりしながら、火心を絶やさずに徐々に火から炎へと大きくすることを心掛ける体験となった。

(5) 体験活動②(野外炊事)

①食材準備

グループごとにメニューの決定、食材の購入を前日までに済ませ、当日も調理の流れをイメージしながら、準備を進めた。野菜や米などを洗う、切るなどしたが、どのグループもそのまま調理できる状態の食材を中心に選択していた。

②食材調理

調理方法としては、バーベキューコンロの上で順に焼く、炒める、ご飯を炊く、ことが共通していた。これまでに経験者がいるグループでは、ホイルに包み蒸すことも取り入れ、調理後は他のグループに振る舞う様子も見られた。

③調理実践例

調理実践として、網の上で焼く「焼肉」、「焼きそば」、ジャガイモをアルミ箔で包んで熱した「ジャガイモのホイル焼き」、飯ごうを用いた「飯ごう炊飯」、飯ごう炊飯で炊いたご飯を利用し、コンロを用いて「バターライス」を調理した。

特に、屋外炉を使用して火をおこしたため、火の調整では焼くものを置く場所を考え、火と焼くものの距離を取るなどした。しかし、短時間で焦げてしまうため注意が必要であった。飯ごう炊飯では、ご飯を炊くことでメニューの幅が広がった。

自分で調理し、さらに戸外での食事という事で、よりおいしく食べることができた。

④野外炊事を通して

野外炊事を実践することで、調理方法や準備の手順など考えながら行う姿が見られた。日常では体験できない火おこしや火を直接使用した調理方法を行うことで、火の取り扱い、調理方法を通じた体験をすることができた。

野外炊事時では、子どもと一緒に野外炊事を行うことを想定した活動ができたと考える。飯ごうやメスティンでコメを炊く時には、火加減を上手く調整しながら蒸らすことにより、ふっくらとおいしく炊き上がり、コメのアルファ化とともに過剰な焦げ付きも防止することができた。あるグループでは、学生の発案で「粒コーン入りガーリックライス」に調理するなど楽しい工夫が見られた。

(6) SDGs に意識した環境への配慮

自然体験活動の一環であるデイキャンプでは、フィールドを設営し、薪割り、火おこし、野外炊事といった自然環境の中で体験できる活動を行った。特に、野外炊事における「食育」では「ターゲット 2. 飢餓をゼロに」や廃棄を少なくした使い捨て素材の不使用では「ターゲット 12. つくる責任つかう責任」また、公園のゴミ拾いをすることで「ターゲット 11. 住み続けられるまちづくりを」、「ターゲット 15. 陸の豊かさを守ろう」を意識して環境に配慮した取り組みをすることができた。このことは現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む(think globally, act locally)ことで、問題解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらすSDGsに着目して取り組むことができた。

本実践では、意識的にSDGsに着目して活動を行ったが、日常的な生活の中にもSDGs達成に向けた配慮をすることが可能である。今後は、SDGsを体験から学び、自らが実践し、子どもたちに伝えることも視野に入れていきたい。

(7) 参加者のアンケート調査

今回の活動は、教員5名、学生11名での参加であった。教員、学生はそれぞれ3グループに分かれ事前準備を行った。事前準備は、当日必要な用具の準備と食事に必要な器具とメニューづくり、食材の購入を行った。各グループの教員は、当日学生だけでは準備できないところの申し出を受けて、できる範囲でフォローした。具体的には、薪割り、タープ、テーブル、椅子などグループごとに相談し、学校で準備できる用具は自分たちで考えて用意をした。教員は学生から要請があった場合のみ運搬等を行った。

参加学生のプロフィールは、「こども学部」に3年3名、2年4名、「保育科」に2年4名で、家族や友人とのデイキャンプか宿泊をともなったキャンプは全員、経験をしていた。宿泊は、主にキャンプ場として整備された場所での、コテージ及びテント泊であった。その期間は、日帰りが最も多く、次に2泊3日であった。グループでの活動についての評価は、5段階で全員の学生が、円滑に準備、活動ができたとプラスの評価であった。理由は、「当日グループ内で困ることがなかった」、「個人で積極的に関わったところと、友人に任せたとこもあったが、円滑に活動できた」、「BBQのとき、グループ内で役割分担ができていた」などであった。回答者全員が今後も継続して活動を続けたいとし、希望する具体的な活動については、BBQ、クラフト、釣りなどを上げている。

自由記述の感想は、「薪割りなど初めての体験ができた」、「初めての体験が新鮮だった」、「自然を感じた」、「野外の食事はおいしい」であった。「友人」、「自然」、「初めて」といった言葉が多く見られ、日常生活と全く違う環境で活動をし、楽しむことができたと推察される。

今回のキャンプは、学生達がこれから自然体験活動を継続し、経験を通して「生きる力」を得て、いずれ保育現場に出て子どもたちへ繋げる一助となる目的もある。普段あまり繋がりのない学生の活動であったが、新たに野外で経験されたことや新しい人と関わる点において有効であったと推測される。

5-2. サマーキャンプ (8月24日～25日)

(1) 概要

学内サークルの初めての宿泊を伴う野外活動であり、自然の中で一日を過ごし、泊まる経験をすることで人と助け合い、自然と親しみを持つことがねらいである。

(2) 準備

キャンプ実施のために、プロジェクト支援の打ち合わせ会(7月1日実施)にてサマーキャンプ実施計画を提案し、実施場所、内容、必要物品の確認および検討を行った。サマーキャンプの実施計画を表3に示す。実施場所は、近隣有料キャンプ施設で、テントの貸し出しが可能なキャンプ場、キャビンがある場所7か所を選定し、参加希望者募集の際に投票にて決定した。

また、夜の暗闇を照らす灯りとしてランタンと野外調理のためのグループ用クッカーは、参加学生がリサーチして購入することにした。なお、リスクマネジメントについては、前回(6月12日)

のデイキャンプ時と同様に行った。

表3 新歓デイキャンプ実施計画

活動名称	サマーキャンプ	
開催日時	2022年8月24日～25日	
会場	岐阜県森林キャンプ場	
経費	A. サークル費: キャンビン2棟 / 28000円、保険300円 / 1人など B. 参加者負担: 食材1人 / 約1500円、交通費など	
参加人数	7名 (プロジェクト教員: 4名、部員: 3名)	
保険	三井住友海上 (レジャー保険) 24時間	
活動内容	1日目	(1) 野外活動 (バンブーライトの制作) (2) 散策などの自由時間 (3) 野外炊事 (竹ご飯、ウッドプランク、カレー) (4) 薪割り・火おこし (5) 星空観察 (6) 野外就寝
	2日目	(7) 野外炊事 (朝食) (8) SDGsのクリーン活動 (9) 荷物の確認および解散

(3) 体験活動について

現在、日常生活で竹や木材を利用することが注目されている。その背景の一つとして、竹林や里山の整備をするために利用を推奨することが挙げられる。特に竹は地下茎の植物であり、春先にタケノコが生えて、その後、春から夏期の間の成長が最も早い。ヒノキや杉などの間伐材についても、近年、適切な活用方法を模索することが多い。里山を含めて山林を元気にするためには、密集し

ている樹を伐るなど適切な手入れが必要である。このように自然の手入れのことも念頭におきながら、それにより得られた竹や木材を用いて次の活動を行った。

制作活動として、竹を利用したバンブーライト作り、竹の飯ごう作りを行い、野外炊事として竹ご飯、間伐材を利用したウッドプランクBBQ等を行った。

① 制作活動 (バンブーライト・竹の飯ごう作り)

バンブーライトは、三重県津市の竹林より伐採したもので、扱いやすいサイズに切断したものを使用した。また、竹は節が残るように切断し、節がない部分を上にしてソーラー充電式のLEDランプを取り付けた (図3)。

竹の穴の加工のために、電動工具のドリルは女性にも扱いやすいよう軽量で回転が速すぎないものを選び、竹専用のドリルビット (4 mm、8 mm、10 mm、12 mm) を使用して制作した (図4、5、6)。

また、竹の飯ごう作りは竹を横にし、左右の節を残して切断する。米を入れるために中央に大きめの開口部を切り取り (図8)、切り取った板につまみを付けて飯ごうの蓋を作った。制作活動時間はおよそ60分であった。

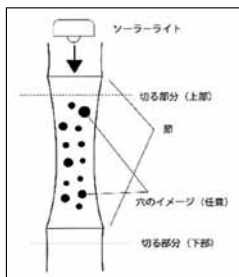


図3 バンブーライトのイメージ



図4 使用道具 (一部)



図5 活動風景



図6 穴あけ加工後



図7 ライトアップイメージ

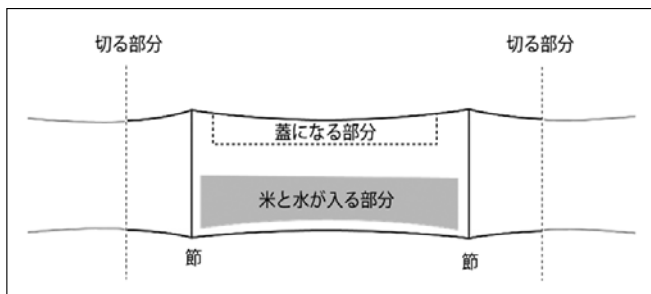


図8 竹飯ごうのイメージ

参加学生から、実際に竹を触ることは初めてで、自然素材を利用してバンブーライトや竹の飯ごうを作ることが面白く、竹に穴をあける過程や蓋を切り取った時の感覚が楽しかったというコメントがあった。また、灯りがつく頃の待ち遠しく思う気持ちも楽しく、灯りがついた時（図7）は感動的だったというコメントもあった。

② 野外炊事（竹ご飯、ウッドプランク、カレー）

野外炊事体験として、竹ご飯、ウッドプランクのBBQ、カレーを作った。

竹ご飯は、手作り竹の飯ごうに米と水を入れて炊いた。実際に、焚き火を使った竹ご飯（図9）は、想像以上の竹の香りがあり、ふっくらとした食感でとてもおいしいというコメントがあった。

次はウッドプランク BBQ である。

ウッドプランクは、海外ではプランク（板）BBQとして知られる調理法で、木材に食材を載せて焼く調理法である（図10）。直火で焼くよりもゆっくり火が通るため、表面はパリッとしながら中はしっとりとした食感が残り、木の香りも付くという特徴がある（朝日新聞、2022）。

使用した木材は、三重県産のヒノキの間伐材であり、幅12cm、長さ22cm、厚み1cmの板に加工し、24時間水に浸して使った。そうすることでヒノキの板に十分な水分が浸透され、板を焚き火に載せても燃えることなく、食材にゆっくり火が通ることになる。板にはBBQ食材を載せて、アルミホイルで蓋をしておおよそ20分間の蒸し焼きにした（図10）。また、BBQに使用して焦げた木板は、薪として活用した（図12）。このような2次使用は、ごみを出さず無駄がないため環境にやさしいと考えられる。さらに、学生リクエストにより夏野菜カレーとキーマーカレーを作った。手作りカレーである（図11）。



図9 炊飯様子



図10 ウッドプランク



図11 手作りカレー



図12 竹や木材の2次使用

(5) SDGsを意識した環境への配慮

サマーキャンプにおける環境への配慮は以下の3点である。

一つ目は、使い捨ての用品の使用はできる限り、少なくすることである。箸、コップ、皿は各自持参することにした。また、使い捨てのものを使用する場合は、プラスチック製品を使用せず、紙製や木製を使用するよう心掛けた。

二つ目は、ものを再利用することでごみを減らすことである。ウッドプランク調理で使用した木板や竹の飯ごうは、鉋で割って薪として2次使用した。

三つ目は、次の人のことや自然環境を考えて、使用した場所をきれいに清掃することである。キャンプ場には人間だけではなく、野生動物も訪れることがある。そのため、使用した場所をもとの状態に戻すことで自然環境を維持することができると思う。

6. 考察およびまとめ

本研究の実践活動について、「目標と意義」、「活動内容」、「参加学生の学びや成長」、「SDGsに意識した環境への配慮」に分けて考察を行う。

一つ目は、学内サークルの目標と意義に関する考察である。本研究では、保育を学ぶ学生が自然体験活動を通して森林環境教育や木育活動への理解を深めることを目標としている。

学生がSDGsの目標を意識し始めたこと、また自ら実践可能な自然体験活動を企画し、実行したことに大きな意義がある。これらの活動を通して森林環境教育や木育活動の必要性を実感し、具体的なイメージをもてるきっかけになった。このような体験は、将来地域の子どもたちを対象に自然を用いた活動を展開していくための実践力の土台になると考えられる。

二つ目は、活動内容に関する考察である。繰り返しになるが、子ども教育の現場では安全管理と安全教育の両者をバランス良く実施する必要がある、自然体験活動や木育活動は実際に必要性の高い状況下に保育者や子どもを置く良い機会となる。

これらの取り組みを通して、子ども教育の現場でキャンプを実施する際に学生や保育者・指導者が、どのような事前準備や安全教育を行うと良いのかを知る機会となったと考える。また、自然環境下や災害時などの調理に関する理解と技能の向上を図ることに繋がったと考える。さらに今後も経験を積み重ねることにより、子育て環境において園のみでなく、親子で料理や食事を楽しむなどといった活動を支援する保育者としての実践力をつけることができると考えられる。

三つ目は、参加学生の学びや成長に関する考察である。今回、新歓デイキャンプ及びサマーキャンプ終了後、参加学生のアンケートを行った。参加学生は、事前に交流があったため、学生同士のコミュニケーションはスムーズに行われ、打ち合わせ等の準備段階からすでに活発にとれていた。

学生が今まで体験してきた学校キャンプでは、準備からプログラムの実施まで決められたものであった。自然を生かした調理などを含むプログラムなどの体験は、ほとんど初体験のものばかりであった。そのため、準備の段階で計画を立てていたものと違って、想定通りにいかなかったこともあった。しかし、デイキャンプや宿泊を伴ったキャンプ経験は、自然の中に浸った五感をフルに使った体験や普段と違った人間交流を得られたともいえる。これらの経験は、将来、自分が子どもをサポートする側の立場に置換して、具体的に考慮できるようになったと考えられ、大きな学びが得られたと考えられる。

四つ目は、SDGsに関する考察である。今回の活動においてSDGsを意識した環境への配慮を行ってきた。それぞれのキャンプでは、フィールドを設営し、まき割り、火起こし、野外炊事を行った。その中で、使い捨て皿やフォーク・スプーンのプラスチック製品使用の削減、ウッドブランケット調理で自然物の再利用を行った。そして、使用した場所の清掃を行うことで自然環境維持といったSDGsのターゲットと一致する体験を行うことができた。このことは、保育者を目指す学生自身が体験をし、学びになることだけでなく、保育者としてSDGsを子どもに伝えるという視点で捉える機会に繋がったのではないかと考えられる。

最後に、今後の活動の展望と課題について述べる。

今後の活動の展望と課題を挙げると、(1) 集団で行う野外活動の中で自然や地域社会と深く関わる機会をもち、体験を通して物事を探索し、深く吟味する機会をもちながら、活動から学ぶことのできる企画を学生が教員と協力して作っていくような支援を行うこと、(2) そうした自然体験活動を通して学生が自然とつながり、仲間と交流し、地域と連携することで、学生自身がこの活動をレジャーとしてだけでなく自分自身の成長と学びの場として意識するような支援を行うこと、(3) そのような自然体験活動を通して森にふれ、木を使い、森の環境を保護し、森とつながるような活動を展開することで、学生の中に「自然を思いやる心」や「自然とともに生きる力」が育ち、学生自身が自分たちの活動がSDGsの目標達成のための学生活動となっていくことを自覚するような支援を行うこと、が核となるだろう。

これらの理念的な課題を具体化していくために、キャンプやバーベキューなどのレジャー体験を入り口としながらも、学生が自分たちの活動を自然環境とのつながりの中で意識していくために、木育や清掃活動、自然観察や事前事後の学習などを有機的に組み合わせていくことが必要となる。SDGsの目標達成に向けた「木と水と人のつながり」というプロジェクトを具体化していくためにも、まず、学生主体のサークル活動として、定期的・継続的な活動機会を作っていくことが必要である。

【引用文献】

文部科学省 (2016) 「子供たちの未来を育む豊かな体験活動の充実」『文部科学白書』、pp29-56.

石井栄司「BBQ 食べて森守? 「おいしい」をSDGsにつなげる大阪の挑戦」朝日新聞、2022-7-21.

大和田 瑞穂・高階 経啓. “みんなでつくる 森の未来地図 SDGs ハンドブック”. 国土緑化推進機構. 2020-8. <https://www.green.or.jp/about-us/sdgs/>, (2021-11-15).

文部科学省. “体験活動事例集—体験のススメー [平成 17、18 年度 豊かな体験活動推薦事業より]”.

文部科学省. 2008-1. <https://www.mext.go.jp>, (2021-10-15).

【参考文献】

野澤 巖 (2009) 「キャンプを企画する人のためのリスクマネジメントの手引き」『社団法人日本キャンプ協会』

野澤 巖 (2010) 「キャンプを安全に楽しもう!」『社団法人日本キャンプ協会』

A Trial of Nature Experience Activities in University Circle

Yim, Hanscop* Ono, Takashi * Murata, Yasuto* Miwa, Masami* Goto, Yumi** Kikuchi, Rie**

本稿は、保育を学ぶ学生が自然体験活動を通して森林環境教育や木育活動への理解を深めることをねらいとする学内サークルを立ち上げ、その学生活動を支援するプロジェクト活動の実践報告である。プロジェクト活動の目標は学生のSDGsの意識を向上させることと、保育者としての実践力を高めることである。

その支援活動として、学生部員を対象に、近隣のキャンプ場で自然体験活動を実施した。学生同士のコミュニケーションが活発になったことから、学生自ら積極的に活動に取り組もうとする姿勢が見られるなど、今後の企画・実行するための土台につながると考えられる。さらに、自然物を有効に活用する方法などを身につけることで、自分なりに自然とのかかわり方を学ぶ機会になり、森林環境教育の観点での教育効果があったと認識することができる。

将来的には、学生が保育者になった時のSDGsを意識した自然体験保育の実践も期待している。そのために、自然体験活動の内容や事前事後の学習などを有機的に組み合わせ、活動機会を継続的に設ける必要があるといえる。

キーワード：自然体験活動, サークル活動, 保育者養成

* Nagoya Ryujō Women's University

**Nagoya Ryujō Junior College

